

第14回

「考古学からひもとく日本食器文化と『歴食』の可能性」

中久保 辰夫（文学部歴史遺産学科 准教授）

「マウスの社会情動性の発達に關与する神経機構」

坂本 敏郎（健康科学部心理学科 教授）

開催日時：2019年6月26日（水）15:00-17:00

開催場所：京都橘大学 響友館 F301

実施報告

考古学からひもとく日本食器文化と『歴食』の可能性

歴史遺産学科 中久保 辰夫

発掘調査で必ずといっていいほど出土する土器は、考古学の研究にとって欠かせない資料の1つです。

本発表では、「年代のものさし」として、遺跡の年代推定に役立ってきた土器について、その基礎から説きおこし、そのうえで最新の研究状況を紹介しました。いまや土器研究は、歴史復元にのみ、とどまるものではありません。自然科学系研究者との共同研究によって、古環境変動が地域社会に与えた影響を調べることで、または土器を焼成した窯跡から採取した資料によって古地磁気の方位を明らかにすることも可能となっています。

一方、比較考古学的な関心に基づけば、世界各地と日本の食器文化の違いを探る作業も重要です。そこで「日本食器文化の特徴とはなにか」といった点について話題を提供しました。これまで、日本食器文化の特徴とは、「おかあさんのお茶碗」といったように個人の食器がきまっていることと考えられ、それが弥生時代にさかのぼりそうだとわかっています。しかしながら、それよりも興味深い特徴は、土師器という酸化焰焼成の焼き物が通時代的に用いられていることです。土師器は壊れやすく、水漏れもしやすいので、機能面からは説明しがたいことです。古墳時代に儀礼用として土師器の器が位置付けられたことが、その後の文化的伝統を決定づけたのだろうというのが私の今の仮説ですが、「土師器の製作者が女性であるということが、どういった歴史的な意味を有しているのか」といった質問をいただいたことは、伝統ある女性歴史文化研究所を有している本学ならではの議論で、深めたい論点をいただいた幸いです。

最後に、この4月に文化財保護法の改正があり、文化財の保存だけでなく、活用といった側面にも注目が集まっています。いま、土器研究はどのようにこたえることができるだろうかといった点について、学生たちと実践している「歴食」の可能性について、お話ししました。



「布留遺跡出土土器」



「歴食部の活動 瓦子チョコレート」

マウスの社会情動性の発達に關与する神経機構

心理学科 坂本 敏郎

オキシトシンは神経ホルモンのひとつであり、視床下部の室傍核と視索上核で産出される。ヒトでは、出産時に胎児が産道を通る時に大量に放出され、母親が授乳する時の乳腺収縮に關与している。げっ歯類では、養育行動や生殖行動の促進、攻撃行動の抑制、社会的認知機能の向上など向社会的行動に重要な役割を果たしている。オキシトシン受容体は脳部位に幅

広く発現しているが、腹腔内にオキシトシンを投与しても血液脳関門を通過しないため脳内に到達しないと考えられていた。しかしながら最近の研究で、オキシトシンを腹腔内投与した後、脳内の海馬や扁桃体でオキシトシンの濃度が上昇することが示された。オキシトシンの治療的な可能性を検討するには、動物を用いて腹腔内投与の効果を検討する必要がある。そこで本研究では、思春期マウスにオキシトシンを腹腔内投与もしくは脳室内投与し、社会行動と情動行動に与える影響を検討した。

4週齢のC57BL/6Jの雄マウスを被験体とし、実験1では腹腔内にオキシトシンを投与し（高濃度群(1mg/kg)、低濃度群(0.1mg/kg)）、社会的迷路課題、社会的選好課題、明暗箱往来課題、高架式ゼロ迷路課題を行った。実験2では脳室内にオキシトシンを投与し(0.5 μ g/2 μ l)、実験1と同様の行動テストを行った。その結果、実験1の腹腔内にオキシトシンを投与した高濃度群は、社会的選好テストでどちらの刺激マウスに対しても社会的探索行動が減少し（図1）、明暗箱往来課題、高架式ゼロ迷路課題では不安関連行動が増加した。一方、実験2の脳室内にオキシトシンを投与したマウスは、社会的選好テストにおいて刺激マウスに対する社会的探索行動が増加し、不安関連行動には影響がなかった。これらの結果から、腹腔内への投与と脳室内への投与で思春期マウスの社会行動と情動性に与える影響は大きく異なることが示された。

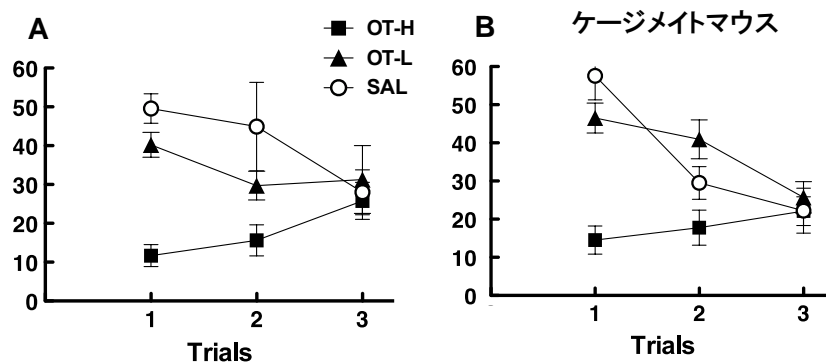


図1：腹腔内にオキシトシンを投与したマウスの社会的選好テストにおける社会的探索(SI)行動

参加者報告

今回の研究サロンでは2つの報告が行われ、活発な質疑応答が行われた。1つ目の報告は文学部の中久保辰夫先生によるもので、土器資料と「歴食」に関する報告であった。先生は現在、日本的な食器文化の形成について研究されており、その専門的知見に基づく報告には知的好奇心を掻き立てられた。土器は年代測定の武器になることもあって、理学系研究者との共同研究がされていることや、未来の考古学者が年代測定をする時に有益なように、建築現場に残されて埋まっていることが多いコーヒーの空き缶で年代の推移が分かるようなコレクションを作られているお話などが特に興味深かった。

2つ目の報告は健康科学部の坂本敏郎先生によるもので、マウスを対象に、オキシトシンと社会的情動性についての報告であった。実験を通して検証していく一連の過程の説明は、明快なものであった。オキシトシンが向社会的な行動を制御していることや分子が大きいいため脳へ入らないこと等、門外漢にも説明して下さった上での報告だったので、理解が助けられ一層興味深く感じた。

